

## 自閉的な子どもへの早期の発達支援に関する研究Ⅱ ー通園施設での取り組みー

森 崎 博 志 (愛知教育大学障害児教育講座)

**要約** 本研究では、身体遊び的なやりとりの中で子どもと視線（注意）の共有や模倣動作を重視した動作法の実践を幼児の通園施設において実施し、2名の自閉的な子どもの事例を紹介した。およそ1年間の短い訓練期間の中で全体的な行動の落ち着きや他者への関心と能動的な関わり、言語発達など、日常的な行動においても大きな変容が見られた。本研究で紹介した動作法プログラムは発達早期の子どもたちの、特に対人的な発達の基盤を育む意義があると考えられた。

**キーワード**：自閉症児，発達支援，動作法

### I. 問題および目的

自閉症は脳障害に基づく発達障害とみなされ、広汎性発達障害の1つのタイプとして位置付けられる。一般的な傾向として、自閉的な子どもたちには、落ち着きがない、行動の調整が難しい、他者の存在を実感する力が弱く他者とのやりとりが難しいなど、行動上の特徴が見られる。したがって、自閉的な子どもへの発達支援においては、行動の自己調整とコミュニケーション発達、つまり他者の存在を実感するという意味での他者認知を育むことが大きなテーマとなる。

動作法は、発達援助技法として様々な発達障害児に適用されており、自閉的な子どもに対しても多く実践が行われている。自閉的な子どもは、他者の存在を認識する力が希薄で、他者と注意を共有することが難しいという問題がその中核にある。したがって、このような子どもたちに対して物を介して関わるのでは、なかなか注意を共有していくことは難しい。動作法においては、子どもと援助者が直接身体を介しやりとりをするため、これらの子どもと援助者との共同注意を成立させるのに有効な状況を整えやすい。身体を直接介し援助者とやりとりすることで、他者の存在を自分との関係の中で体感し、他者と関わる実感（他者認知）を育むことができる。そして、このことが言語発達を含めたその後の発達の基盤となるものと考えられる（森崎，2002）。従来からの視点も踏まえて整理すると、動作法を通した（遊びを介した場合も含め）自閉的な子どもへの関わりにおける治療的なねらいは、「自己認知」と「他者認知」を育むことであると考えられる。「自己認知」に関するねらいは、①「ゆったり落ち着く力」と②「行動の自己調整力」を育むこと、「他者認知」に関するねらいは、③「他者認知（自己－他者の関係性）」及び④「(3項関係としての)共同注意」を育むことの4点に整理でき、これらが自閉的な子どもの社会的な行動様式の変容の要因となる

と考えられる（森崎，2004）。

一方、近年の神経学における脳の扁桃体機能画像研究により、視覚刺激、中でも表情や視線などの顔に関する扁桃体の賦活が報告されるようになった。扁桃体は、①恐怖表情や、②視線が合う状況においてその賦活がたびたび確認されている。対面する人の顔の中でも相手の目（視線）が見え、相手と眼差しを交わすような状況において扁桃体がより強く活動することが示唆されている（秋山ら，2005）。自閉症児は、他者と視線を合わせたコミュニケーションがとりにくいことから、これまで顔および表情に注目して対人認知を調べる研究が多くなされ、表情認知の弱さについては従来から多く指摘されている。神尾ら（2003）は、感情プライミングを調べた結果、自閉症スペクトラムの人々が顔への選好や基本感情について、（記号的な処理をしている可能性はあるものの）潜在的（直感的な）処理を欠いていることを示しており、情動的評価の障害の神経基盤として扁桃体機能不全の関与を想定している。また、自閉症成人の結果に個人差が見られたことから、自閉症は、脳の成熟に伴い通常の対人学習を通して獲得されるはずの、対人認知を伴う広汎な神経回路（扁桃体－前頭葉眼窩野－上側頭葉）の結合の失敗であると捉えており、個人的経験（や発達支援）による発達の可塑性（可能性）や代償メカニズムの存在も示唆している。このように、近年明らかにされてきた脳の研究は、目（視線）を合わせること、それ自体が扁桃体の賦活を引き起こすことを明らかにしている。

筆者は以前より、自閉的な子どもへの関わりにおいては、身体（動作）を介したやりとりの中での視線（注意）の共有が対人認知の形成に大きく関与しており、子どもの発達の変化の大きな契機となることを特に強調してきた。臨床実践における見解と近年の神経学的知見の双方から、自閉症児と身体を直接介した関わりの中で視線（注意）の共有を重視していくこと

は、自閉症児の早期の発達支援を考える上でやはり重要なポイントであると考えられる。

筆者は、日頃の実践において動作法と遊びを関わり的手段としながら就学前の自閉的な子どもの発達支援を行ってきた。現在は、幼児の通園施設においても、発達に遅れのある子どもたちに、週1回動作法（身体的相互交渉を基盤とした取り組み）を実施している。そして、その中核にあるのは、やはり、身体を介し「対人認知」を育むことである。つまり、身体的な相互交渉を通し、「注意（視線行動）の共有」、その中で「対人認知（自己―他者関係）の形成」へ、さらにそれを基盤に「3項関係の形成」、というコミュニケーション発達の流れを意識した関わりを続け、言語を含むコミュニケーション行動の発達を促すことをねらいとしている。従来の動作法と異なる点を整理すると、①子どもと対面し眼差しを交わしていくこと、②模倣動作、③指差しでの腕上げによる3項共同注意、などについてより積極的に取り入れている点である。もちろんこれらは、身体を介したつぷりと触れ合い、ゆっくりとやりとりをしていきながら行うものである。

近年、小学校の通常学級においても発達に遅れのある子どもが多く在籍する傾向が見られているが、それ以前の段階であるこうした通園施設や保育園においても、発達に遅れのある子どもたちが通園するケースが増加している。これらの子どもの発達支援を考えると、通園施設などにおけるより早期のケアが望まれる。しかし、通園施設においては、専門的な発達臨床の知識や経験を有する職員は非常に少なく、動作法などをそのままの形で導入していくことは難しい。園や家庭でも簡易に実施できるような身体遊び的なプログラムとして、シンプルな形態にアレンジしていくことも必要と考えられる。

また、実際に筆者が自閉症児の発達支援を行ってきた中でも、やはり発達の可塑性の高い就学前の子どもたちにおいては、支援を通した行動の変容が際立つ印象がある。学齢前の幼児の発達支援については、3項関係でのやりとりや言語発達以前に、まず身体を介してつぷりと人と触れ合うことで、発達の基盤とも言える「自己―他者」という2者関係を育むことが重要な発達の要因となると考えられる。したがって、幅広く子どもの発達を考えた時、幼児の通園施設などにおいて、このような身体遊びを重視した関わりの時間を設けることは極めて重要な発達の意義を持つと考えられる。

本研究では、このような身体遊び的なやりとりや、援助者と視線（注意）を共有することを重視した動作法での発達支援に取り組んだ中から、卒園した2名の自閉的な子どもの事例を紹介する。対象児の訓練場面の行動や日常的な行動の変容について考察するとともに、自閉症児のコミュニケーション発達を促すこと

を前提とした援助者の関わりの在り方について考察する。また、通園施設での取り組みや、早期の発達支援について、今回の活動経験を基に、その在り方や課題について検討する。

## Ⅱ. 方法

セッション：週1回、60分（動作法）。

トレーナー（Tr）：動作法歴1～2年の学生が担当。

担当期間：X年11月～X+1年12月

実施形態：対象児（Te）は自閉症児や肢体不自由児など発達に遅れのある子ども12名程度。子ども1人にマンツーマンでトレーナーが関わる。トレーナーは、学生9名、職員3名。場所は、通園施設H訓練室。1名～2名のスーパーバイザー（筆者）が全体の指導にあたった。なお、通園施設Hは、統合保育であり、健常児と発達障害児がほぼ半数ずつ在席している。動作法のセッションは、発達に遅れのある子どもで希望者を対象としている。

動作課題：始めに「はじまるよ」の歌を皆で歌い、その後マンツーマンで課題を行う。自閉的なタイプの子どものについては、下記①～③を主要な課題として設定している。

### ① 腕上げ

〈段階1〉子どもが援助者と一緒にリズムに合わせて楽しく腕を上下に動かすことができる。

〈段階2〉子どもが援助者に合わせて腕の動きをコントロールできる。

〈段階3〉援助者が子どもの手に軽く触れる程度で動きを伝える。アイコンタクトをとりながら、2人が一体となるような感じで一緒に腕を動かすことができる。

### ② 軀幹ひねり

〈段階1〉子どもが援助者に応じてリズムに合わせて自分の体を大きくねじる。

〈段階2〉子どもが体幹をひねりながら、援助者に合わせて少しずつ肩の力を抜いてリラックスできる。

### ③ 背そらせ

〈段階1〉後ろから子どもをやさしく抱っこし、ゆっくり援助者に子どもが身を任せるようにする。

〈段階2〉子どもの背中をブロックし、援助者の働きかけに応じて、身体を動かすことができる。

〈段階3〉子どもの背中をブロックし、援助者に身を任せて充分に上体が弛み、ゆったりした感じが出るようにする。

なお、動作法になじみのない職員や母親も前提とするため、これら比較的取り組みやすい課題を基本としている。課題全体を通して、援助者と楽しく身体を介してやりとりしていくことや、援助者と視線（注意）を共有することを特に重視した取

り組みを行った。いずれの課題もただ身体を動かすのではなく、援助者の動きに合わせて、子ども自身もやりとりする感じが出るように行った。

**発達検査：**今回の取り組みによる子どもの変化を把握するため、対象児 S、K それぞれに、「小児自閉症評定尺度（CARS）」と「遠城寺式・乳幼児分析的発達検査」とによる検査を行った。これらの検査は、動作法訓練場面の様子や園での活動の記録、園の職員や母親の話などを参考として、担当者が検査用紙に記入し評価した。

### Ⅲ. 経過と考察

訓練の様子は毎回の訓練記録を基に、日常の様子は園の連絡帳と、半年ごとのまとめの記録を基に経過報告する。（なお、事例1については当時本課程在席の長嶋桃子氏、事例2については伊藤由美氏にTrを担当してもらい、筆者はスーパーバイザーとして両ケースの指導と訓練にあたった。経過は両者による記録を基に整理している。）

#### <事例1 自閉症男児 S（当時5歳1月）>

##### セッションでの動作課題

「腕上げ」、「軀幹ひねり」、「背反らせ」、「膝立ち」

##### インテーク時の様子

緊張気味。こちらにゆったりと身体を預けられない。落ち着きがなく、すぐに動きたがる。視線はほとんど合わない。動作課題は何をしたら良いかはっきり伝わっていない様子で、長くなると逃げ出してしまふ。言葉はオウム返しがほとんど。日常でも、新しい場面にすぐに慣れることが難しい。同じ服ばかり着るなど、固執が見られる。一人遊びが多く、他の人と関わったり、他の人に合わせて行動することは難しい。

#### 1. 全体的な行動の変容について

##### 第1期（#1～8）

###### <動作法>

#1腕上げで初めは何をしていいかわからない様子。自分で動かす感じはない。#3腕上げで時々Trを見ながら腕を動かす様子も見られた。#6<腕上げるよ>と言うと自分から腕を上げたが、まだ主体的な動きは弱い。前屈・背反らせは、#1からあぐら座位でじっとしていることが難しく、なかなか上手できておらず、#7で少し強めに関わると嫌がり初めて「イヤー」と声を出した。

全体に、落ち着きがなく、ほとんど目を合わすことがない。身体を動かすのも受け身的で、やりとりはあまりできていなかった。腕上げは多少応じられるが、軀幹ひねりや前屈・背反らせではじっとしていること

が難しい。Trとしては、関わる際にはしっかり声かけをする、表情もはっきり伝えるなど、働きかけを工夫し、Trの方に注意が向き、目が合うように意識した。また、1つの課題をある程度短い時間で区切り、その中で集中できるよう意識した。TeがTrに注意を向けやすい状況を作ったことにより、自分の身体やTrに少しずつ注意を向けることも多少出てきたが、全体的な印象としては、他者へ注意を向けることはまだ弱い状態であった。

また、言葉はオウム返しがほとんどであった。

###### <日常生活>

レンジャーの服ばかり着てジャンパーも脱がないなど固執が見られる。園での散歩の行き帰りに他園児と手をつなぐこともあるが、一人で遊ぶことが多い。

##### 第2期（#9～18）

###### <動作法>

#9腕上げで当初より視線が合うようになり、2～3秒持続する。#10腕上げは軽い補助でも動かせ、しばらくの間だが、真剣な表情でTrの働きかけに回答できた。#11腕上げは大まかな動きであれば比較的ついてくることができ、#13では軽い補助で指に注意を向け動かすことができた。#17これまで嫌がっていた軀幹ひねりで落ち着いてできるようになり、Trの合図に合わせて上体の力を弛められた。前屈・背反らせはまだあまりできないが、ブロックを弛めるとTrに身を任せることができた。

全体に、少しずつ目が合う感じが強まり、終盤、特に#17から目がよく合うようになった印象。動作課題に対して受け身的な部分は残るものの、自分の身体を意識し、動きをコントロールする感じが出てきた。Trとしては、しっかりと視線を合わせてから始めるなど、集中して動作課題に取り組むことができるように意識した。Trの働きかけに応じる、Trにゆったりと身を任せる面が見られてきた。

###### <日常生活>

他の園児への関心が見られてきた。また、職員に話しかける姿が見られるなど、他者に自発的に向かっていく様子が見られてきた。遊びでは、ボールを正確に投げ返すのは難しいが、何とかキャッチボールをする時もある。

言葉は、「デカレンジャー」、「ガオレッド」など独り言が多いが、「おきなさい、Iさん」など職員に話し掛けることが見られ始め、「イヤ」など意思を言葉で表現することが出てきた。#17では、訓練後に「ありがとうございます」と自ら言う。

##### 第3期（#19～25）

###### <動作法>

#21導入の身体遊びで「いないいないばあ」をやると喜び、自ら「いないいないばあやる」と言う。対

面して目がよく合い楽しくやりとりしている途中、急に「目」と言ったのが印象的であった。2期でしだいに視線が合う感じが強まっていたが、表情や目を明確に捉え始めたことを表すようにも思われた。また、軀幹ひねりでは、やはり逃げようとするが＜もう少し＞と言うとゆったりと弛めることができた。膝立ちでのバランスは不安定。#22, 23, 24腕上げ、軀幹ひねりでやはりよく目が合う。#23ふとんのある部屋での訓練で合間に遊んでいると、Trもふとんの中に一緒に入れてくれるなど、Trを意識して一緒に遊ぶことが多くなった。#25訓練終わりのあいさつではTrと目をしっかり合わせながら言うことができた。

全体に目がよく合う印象で、しばらくジーッと視線が持続することが多くなった。動作課題にもよく取り組むことができ、自分で身体を動かす。身体遊びを楽しみ、一緒にやり取りしている感じが強くなってきた。まだ全般に独り言が多いが、問いかけに対しオウム返しではなく答えられたり、要求の際など自発的な2語文が多く見られるようになった。また、Trなど他者への注意がかなり持続できるようになった。周囲の状況にも目がいくようになり、言葉で要求を伝える力や質問に回答する力を身につけ始めた印象。動作課題に身体遊びや手遊びを多く取り入れ、楽しみながら一緒にやりとりできるよう意識した。自発的な要求や質問への回答ができるようになってきたため、簡単な質問をし、言葉でやりとりする機会を作るようにした。

#### <日常生活>

以前はなかなかじっとして遊ぶことができなかったが、1つの場所で遊ぶことが増えてきた。他園児とも一緒に遊ぶ姿が多くなり、順番を守って遊んだり、園児の帽子を取って気を引くような場面なども見られるようになった。また、以前はなかなか着られなかったレンジャー以外の服を自分で選んで着ることができるようになった。父親と一緒に登園した時には、父親が帰ってしまうと少し寂しそうな場面も見られた。要求の際などにも、相手の目を見て訴えることが多くなってきた。日常においても、周囲の人を意識し、自発的に関わっていこうとする面が全体に多くなった印象である。

言葉は、普段はまだ独り言が多いが、＜散歩行くか＞の問いに「散歩行く」と（オウムが返しでなく）答えたり、#20でも「アイスクリーム」と言ったので、＜何のアイスクリームが好き？＞と聞くと、「ソフトクリーム」と答える。また、「トイレ行く」と言ってからトイレに行く、「ブランコ乗る」と言ってブランコで遊ぶなど、自分の意思を2語文で伝えることが見られてきた。

#### 第4期（#26～36）

##### <動作法>

#26始まりの歌を自発的にTrの手を持って一緒に動かしながら歌う。動作課題中以外でも、ジーッと目が合うことが多くなった。#27腕上げはかなりよく目が合う。あぐら座はなかなかしかりでできなかったが10秒くらい真直ぐの姿勢でじっと保持できた。訓練中の独り言もあまり見られなくなった。膝立ちはこれまであまりできていなかったが、不安定ながらも姿勢を保とうとする。#28訓練を嫌がる場面も時々見られるが、集中している時は課題に真剣に取り組む。#30腕上げで自分で「ピタッ」と言いながら正確にできた。腕上げ、軀幹ひねりとも目がずっと合い、独り言もない。膝立ちも少しだけだが姿勢が保持できた。#32Trに積極的に関わり、「お姉さん」、「M子さん」と呼ぶようになった。#33部屋から出た際、わざとTeから見えない場所でTrが待っていると自らTrの様子を窺いにきた。#34腕上げでジーッと目が合い、軀幹ひねりも落ち着いている。苦手なあぐら座もスムーズに姿勢がとれる。膝立ちもしばらく姿勢を保持できた。#36自発的に「お姉さん、おいで、行きましょう」とTrを遊びに誘うこともあった。

全体に、周りの状況によく目がいくようになり、他園児と一緒に模倣遊びやTrと物を介して遊べるようになった。また、指差し産出も多く見られるようになってきた。Trとしては、集中できる時間を増やしていくことを意識した。3語文が見られてきたので、よりゆっくりと多く話しかけるように心がけた。

#### <日常生活>

泣いている子にハンカチを差し出す、頭をなでてあげるなど、いたわり行動が見られた。散歩の時に、いつもと違う道は当初なかなか通れなかったが、違う道でも固執せず帰ることができた。全体に、周囲の人への自発的な働きかけや3語文での自発的な要求など、多く見られてきた印象。

#26で初めて3語文が出現し、#30で3語文での自発的な要求が見られた。また、＜どっちに行きたい＞と聞くと、行きたい方を指差すなど、回答の指差しらしきものが見られた（#28, 33）。#29で訓練から抜けてしまった際、お茶を飲みに行き「S、飲んだら行きます」と自ら報告。#35では「トラック、ブーブーする」とやりたいことを3語文で表現した。

#### 2. 言葉の変化について

Teが発した、主な言葉は、①「物に関する独り言」、②「オウム返し（Trの言葉を真似して言う）」、③「人に関する独り言」、④「応答」、⑤「（自発的な）要求語」、⑥「相手への呼びかけ」、の6つに分類された。Teの場合、第1期から①～⑥の言葉は出現していたがセッションを重ねていくごとに大きな変化が見られた。

第1期：全体として、①「物に関する独り言」の頻度が多い。⑤「要求語」は「イヤ」など、1語文で伝える。⑥「相手への呼びかけ」はほとんどTrが誘導的に促した場合のみで、自発的には見られない。

第2期：第1期に比べ、③「人に関する独り言」が増えてきた。⑤「要求語」は2語文を使用することが多くなる。⑥「相手への呼びかけ」は自発的なものが出てきた。

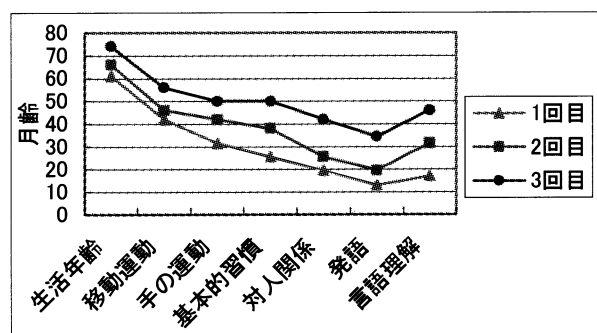
第3期：①「物に関する独り言」は2語文で言うようになってきた。④「応答」は簡単な質問に2語文で（オウム返しでなく）答えることができるようになる。⑤「要求語」の頻度が増加。また、言っていることとやりたいことが一致してきた。⑥「相手への呼びかけ」は自発的で、よく見られるようになってきた。

第4期：①「物に関する要求語」が減少する。⑤「要求語」は3語文で伝えることも見られ始めた。⑥「相手への呼びかけ」は自発的にお礼やあいさつなども言うようになった。

全体として見ると、⑤「要求語」や⑥「相手への呼びかけ」が明確になってきたこと、また、①「物に関する独り言」が減少してきたことなどが特徴的な傾向と言え、対人的な志向性が言葉の使用においても明確に見られてきたように思われる。

### 3. 発達検査に見られる変化について

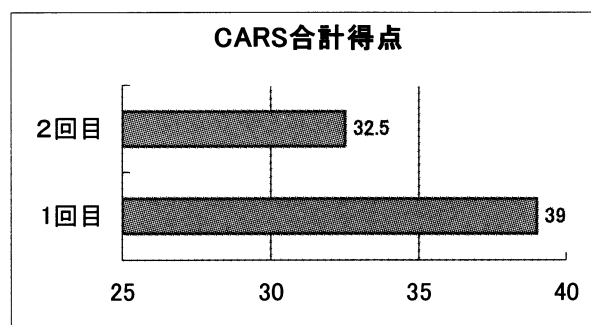
#### (1) 遠城寺式・乳幼児分析発達検査



遠城寺式発達検査では、「基本的習慣」、「対人関係」、「発語」、「言語理解」などに大きな変化が見られている。ところで、自閉的な子どもへの動作法のねらいは、大きく「行動の自己調整」と「対人認知」を育むことであると考えられる。「対人認知」については、前項でも述べたように、身体でのやりとりを通して他者に注意を向け、他者と注意を共有する経験を通して「対人認知」が育まれていくものと考えられる。そして、それが基盤となって「対人関係」や「発語」、「言語理解」にも変化が見られたものと考えられる。また、「基本的習慣」は、動作法を通した「行動の自己調整」と関連が深いと思われるが、対人的な力の伸びにより、指示理解なども高まり、家庭や園での関わり

を通して生活上の力が高まったことと相俟って変化が見られたものと言えよう。

#### (2) CARS（小児自閉症評定尺度）



表に示されるように、CARS得点も大きく変化（自閉傾向の低下）していた。なお、CARS得点については、30点未満は自閉症でなく、30点～36.5点は軽・中度自閉症、37点以上は重度自閉症とされている。自閉性の中核は対人的な関係性の障害にあるが、動作法での関わりの意義は、まさにその対人的なやりとりの力を育む点にある。経過に伴いよく注意が共有できる（視線が合う）ようになり、対人的な疎通性の高まりが窺えたが、それがCARS得点にも表れたものと考えられる。

### 4. まとめ

当初、落ち着きがなく、目を合わすことが難しく、やりとりがあまりできなかったS児であるが、2期で、少しずつ目が合う感じが強まり、動作課題でTrに応じやりとりする感じが出てきた。3期には、全体に目がよく合い、しばらくジーンと視線が持続することが多くなった。身体遊びで楽しく目を合わせていた際、急に「目」と言うなど、相手の表情や目を明確に捉え始めたように感じられた。言葉もオウム返しが減り、自発的な2語文が多く見られるようになった。また、1つの場所でじっと遊ぶなどの落ち着き、他園児と一緒に遊ぶ、要求の際に相手の目を見るなど、周囲の人への意識と自発的な関わりが見られるようになった。一緒に通園した父親が帰る際の寂しそうな表情など、他者に注意を向けるだけでなく、情動的な共有のようなものも見られてきた印象である。レンジャー以外の服を自分で選んで着るなど、固執も薄れてきた。4期に入ると、周囲の人への自発的な働きかけが高まり、3語文での自発的な要求なども見られてきた。模倣遊びや物を介して遊べるようになり、応答の指差し産出も見られた。自閉症児にはなかなか見られない「いたわり行動」も見られ、他者へ注意をしっかりと向けることから、さらに他者の情動的な面へも意識が及び始めているようにも思われた。

S 児においては、一言で言えば、他者に対する注意の持続、特に視線がしっかりと一致し持続するようになったことが最も特徴的な変化であり、それが対人的な志向性の大きな高まりとして表れたものと思われる。そしてこのことが、他園児や職員との関わり広がりなど、対人的な関わり全体的に及ぶ行動変容の基盤となったものと考えられる。

このことは、言葉の発達にも少なからず影響を与えたことが予想される。S 児においては言葉の使用にも大きな変化が見られた。言葉の使用も対人的な関わりの一つであるが、もちろん、動作そのものと言語発達には直接的な関連は見られないかもしれない。しかしながら、言葉の発達の前提としての対人的なやりとりの力に関しては、動作法での関わりは大きく関与するものと考えられる。つまり、動作法による身体を介したやりとりの中で、他者と注意を共有した濃密な関わりが他者認識を育み、対人的な行動に変化が見られたものと考えられるのである。訓練では、身体でのやりとりを通して、しだいにTrに注意を向け、Trと眼差しを共有できる場面が多くなっていった。日常でも他者と視線を合わせながら、相手にしっかりと注意を向け続けられるようになり、それが基盤となって相手の発する言葉などもしっかりと聞き取れるようになっていったことが大きな要因であろう。

自閉症児に多く見られるオウム返しですが、当初S児にも多く見られていたが、セッションを重ねるうちにその頻度は少なくなった。例えば絵カードなどによって言葉数を増やそうとする試みはよく見られるが、たとえば言葉数は増えても、それではオウム返しそのものは変わらない。オウム返しが変わるためには、「自己－他者」という対人的な繋がり感覚と、「自と他」の区別とが育まなければならないからである。身体を介して触れ合うこと、その上で眼差しをしっかりと交わしていくことが、これら「自己－他者」という対人的な繋がり、と「自と他」の分化を育むことに大いに関与するものと考えられる。また、S 児においては独り言もかなり減っているが、これもやはり対人的な繋がり感覚の問題が関与しているものと言えよう。

また、Trの言葉による関わり自体にも言葉の発達を育もうと意識した面も見られる。まず、他者を意識せず、意味を持たない独り言を発していた時期、Trはその言葉に一言付け加えるようにしてTeに返し、相手のことを意識できるように心がけた。自発的な要求や質問への応答が出来てきた時期には、簡単な質問を投げ掛け、言葉でのやりとりを広げる機会を作るように意識していた。このような点も、言葉の変化に繋がっていった一因であろうと考えられる。

## ＜事例2 自閉症男児 K（当時5歳4月）＞ セッションでの動作課題

「腕上げ」、「軀幹ひねり」、「背そらせ」、「膝立ち（片膝立）」、「立位」、「模倣動作（Trと対面し模倣しながら動かす）」。

### インテーク時の様子

周りや外を見ていて落ち着きがない。Trの働きかけに対して、うなづくことはあるが、顔を向けることはしない。動作課題でも、ゆったりと落ち着くことができず、常に手足が動いている。言葉はすでに出ているが、抑揚がなく一本調子。母が見えると、すぐに掛けよって甘える。母の前では明るい表情。

日常では、母親の話すことをそれなりに理解し、指示も通る。日常生活に大きく支障があるという状況ではないが、何に対しても集中力が続かず別の行動に移ってしまう。落ち着きがなく、行動の調整に難しさがある。また、あまり身体を使って遊ぶことがなく、室内でビデオを見たりゲームをして一人で遊んでいる。友達と遊んだり、近所のお兄さんやお姉さんと関わるのが難しい。

主訴として、人とやり取りができるように、集中力がないので、もう少し落ち着いて行動の調整ができるように、身体を動かして遊べるように、トイレを立ててできるように、ということが述べられた。

## 1. 全体的な行動の変容について

### 第1期（#1～4）

#### ＜動作法＞

#1 腕上げで姿勢をとるのを嫌がり、仰臥位になれない。軀幹ひねりでもじっとできず手足を動かしてしまう。#2 膝立ちをやってみるがすぐにしゃがんでしまう。#3 腕上げの姿勢にはなるが、集中できない様子で何度も起き上がってしまう。しかし、途中一度だけ初めて一緒にゆっくりと動かすことができた。膝立ちでは一瞬やる気を見せ、膝立ちの姿勢をとってみるがあまり踏ん張ろうとせず、バランスが崩れると横に寝転んでしまった。#4 腕上げで自分でしっかりと動かす感じは乏しく、腕を動かしても肘が曲がってしまう。

全体として、訓練そのものに気持ちがあまり向いていない状態。あまりTrの方に顔を向けることがなく、目を合わせて動作課題に取り組むことができない。落ち着きもなく、また、動きについても受け身的で、Trの働きかけに応じてTe自身が動かしていく感じが乏しい。ただし、後半は少しずつではあるが動作課題に多少取り組もうとする所も見られてきた印象。

#### ＜日常生活＞

以前から家庭で読み書き課題を行っており、2～3分しか続かなかったが、10分程度続くようになってきた。園では、自ら職員の気を引こうとするようになり、また、職員へのスキンシップ的な関わりが多くなった。ただし、他の（健常の）園児との関わりはこれ

までと変わりなく、マイペースで一人で遊んでいることが多い。

## 第2期（#5～9）

### ＜動作法＞

#5動作課題に入るのを嫌がったので、導入としてシーソーなど身体遊び課題を行ううち、「もっと」と要求してきた。腕上げでは、キョロキョロ頭を動かすことが少なく、Trと顔を合わせることが多くなった。自分で動かす感じも出てきたが、Trに合わせることはできない。#6腕上げでTrが「ごろんしてね」と言うと、初めて自分で仰向けになることができ、声かけに合わせて始められた。Teの手を軽く補助しTrの動きに合わせて動かすことができた。背反らせでは、これまでなかなか身を任せることができなかったが、ゆっくり身を任せることができた。膝立ちでも初めて自分で上体を起こして前を向き、しっかり立とうとしている感じが感じられた。#8Trがくあいさつしようよ>と言うと、自ら向かい合って座り直し、「よろしくをお願いします」と目を合わせて一緒にあいさつする。#9腕上げでTrと目を合わせながらTrの動きに合わせてゆっくりと動かすことができる。膝立ちでは、軽い補助でも自分でバランスをとりながら姿勢がとれている。

Trの声掛けに応じて顔を向けたり、目を合わせて動作課題に取り組めるようになり、Trの働きかけに合わせて身体を動かせるようになってきた。Trという他者との関係性が成立し、やりとりを実感を持って行うようになってきたと感じられた時期。また、動作課題以外にも、子どもと対面する形での動きを通した身体遊びとして、「シーソー」、「いないいないばあ」、「顔まね」なども楽しむようになった。

### ＜日常場面＞

断片的に園での出来事を母親に家で話すようになる（#7）。読み書き課題では色やひらがなに興味を持つようになり、文章の長い絵本にも興味を持つようになった。園での食事場面では、職員の声掛けに応じておかずの盛り方の量を少なめにすることができ、給食時間内に完食できることも増えてきた。

周囲の人と言葉でやり取りすることが多くなり、自分から職員さんに話しかけたり、職員さんの声掛けに言葉で答えるようになった。他の（健常の）園児にも興味を持つようになり、じっと園児を観察したり、みんなが行く方向と一緒に走っていったりするようになった。

## 第3期（#10～15）

### ＜動作法＞

#10腕上げで、自ら「これでやる」と人差し指を出す。初めて指と指を離し、Trの指先を見ながらTrの指差しに合わせて慎重に腕を動かしていた。立位では片足立ちに取り組み始めたが、クネクネしてしま

いバランスが崩れてしまう。#11前回同様、指差しでの腕上げを行う。途中注意が切れそうになっても、Trの声かけで注目し直すことができた。片足立ちでは、Trにつかまりながらだが、しばらく姿勢をとることができた。#12腕上げで自ら人差し指を出し「指1本でできる」と主張。膝立ちでも初めてTrに合わせて重心移動ができ、片膝立ちでは「10秒頑張る」と初めて長く時間をかけて集中して取り組むことができた。#13立位での模倣動作課題では模倣で上手く姿勢が取れたが、開脚などではバランスを崩してしまう。#15腕上げでは、指差しでも速い動きができるようになった。膝立ちでは補助なしでしばらく真直ぐの姿勢を保持。片足立ちでも、補助なしで立つことができた。

Trの指示をよく捉えながら、Trに合わせて自分の身体の動きを自己調整できるようになってきた印象。全体的に動作課題での細かいやりとりが可能となってきた時期。また、動作課題から離れて遊び出したりせず、集中を持続して動作課題に取り組むようになり、自らやり方を主張するなど意欲的な様子も見られてきた。また、膝立ち、片膝立ちなどの、難易度の高いバランスどり課題にも集中して取り組むことができるようになった。

### ＜日常場面＞

読み書き課題で、字を書くことにも興味を持ち始め、自分から鉛筆を持って積極的に取り組む姿勢が見られてきた。園での職員への関わりは2期同様積極的で大きな変化は見られない。他の（健常の）園児との関わりについては、まだ自分からみんなの遊びの中に入っていったり、話し掛けたりすることは難しいが、少しずつ他の園児と遊べる場面も見られてきた。

## 第4期（#16～24）

### ＜動作法＞

#16腕上げでは一緒に数を数えながら指差しでじっくり取り組めた。#18腕上げでわざとTrの動きと反対の動きをして面白いがる。#19片膝立ちで補助なしでしばらく姿勢を保つことができた。#20初めTrに向かってにらめっこの「あっぷっぷ」を何度も繰り返し面白がっていたが、腕上げに入ると集中して取り組めた。片足立ちは補助なしでも少しは姿勢が取れるがすぐバランスを崩してしまう。#20Trに合わせても課題に取り組めるが、自分流にやることを強く主張し、思い通りにいかないと反抗する。#23補助なしでしばらく片足立ちができた。これまでよりふらつきが少なくなり安定してきた印象。#24膝立ちではこれまでより自分の動きをしっかり意識して重心移動ができ、片膝立ちでも声かけに合わせて前後に重心移動ができた。立位での模倣動作課題でもTrの動きに合わせて一つ一つの動きを正確にゆっくりできるようになった。

模倣動作課題などの際に、両者が離れた位置にいても、声掛けによりTrの働きかけに合わせて身体を動かすことができるようになり、訓練を通してTeと一体感を味わいながら動作課題や会話を楽しめるようになった時期。一緒に身体を動かして楽しむようになり、楽しみながら模倣動作（対面で同じ動作を行う）での立位課題などにも取り組むようになった。一方で、自分の興味のないことは拒否したり、わざと自分勝手に動いたり、Trの指示と反対のことをして面白い（からかう）ような面も見られるようになった。

#### <日常生活面>

家庭では色々なことに取り組めるようになってきた一方で、頭で考えて「できない」と思ったことは、すぐに諦めてしまうことも見られてきた。園では、職員と関わりを持とうとするだけでなく、積極的に言葉で話すようになってきた。動作法の場面でも、担当以外の他のTrに対しても自分から働きかけていくなど、対人的な関わりに広がりが出てきた。また、園の活動においても、周りの状況を見て行動できるようになり、色々な物事に対しても意欲的に取り組むようになった。自ら積極的に他の（健常の）園児の集団の中に入って遊ぶようになり、より相手を意識して関わっている。他の園児に対しても少しずつ自己主張ができるようになってきた。

## 2. 言葉の変化

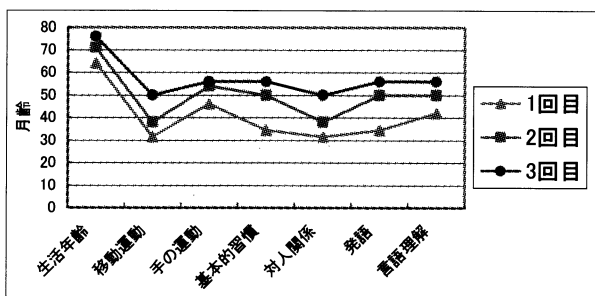
**第1期：**自発的な言葉は出ているが、言葉で人とやりとりする感じは乏しい。また、視線が定まらず、言葉を発しても誰に対しての言葉なのか分からない。

**第2期：**目を見ながらTrに呼びかける感じで話し掛ける。Trの声掛けに対して目を見て答える。言葉そのものではないが、他者との疎通性が出てきた印象。

**第3期：**他者に対しての自己主張が強くなった。また、職員などに助けを求めてくるようになった。

**第4期：**会話をしながら訓練に取り組むなど、お互いが交互に話す感じで、言葉でラリーが続くようになった。

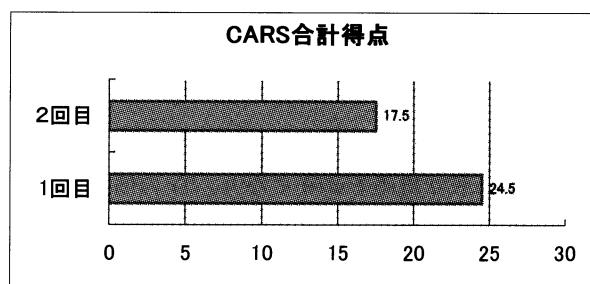
## 3. 発達検査に見られる変化について



K 児の発達の遅れは、当初より比較的軽度であ

ったが、3回目の検査では、「手の運動」、「基本的習慣」、「発語」、「言語理解」の各項目で、測定可能な4才8ヶ月のレベルを超えてしまった。そのため、それらの項目の3回目の数値は、実際はより高い発達レベルにあると想定される。その点も踏まえながら遠城寺式発達検査の結果を見ると、「基本的習慣」、「対人関係」、「発語」の項目で伸びが大きく、全体的にもTeが大きく発達していることが窺える。動作法での身体を介したやりとりを通して、他者との注意の共有が深まり、他者との関わり全体がしっかりとまた広がりを持ってきたものと考えられる。それが言語でのやりとりの広がりを含む、対人的な関わりの広がりにつながったのであろう。なお、その点については、セッションの中で模倣動作課題なども積極的に取り入れ、人と向き合い、相手と自分を対象化しながら模倣を繰り返していく体験を重ねていったことも大きな要因と考えられる。

## (2) CARS（小児自閉症評定尺度）



K 児においては、当初より発達の遅れは少なく、自閉的な傾向も軽度であったが、セッションを通し、自閉傾向はさらに弱まり、「自閉的」な範疇には入らないレベルとなった。やはり、身体を通したやりとりを通し、対人的なやりとりの力が深まり、日常においても対人関係を築きやすくなったものと考えられ、それがCARSにおいても表れたものと言えよう。

## 4. まとめ

当初、落ち着きがなく、訓練に受け身的で、Trに応じTe自身が努力する感じが乏しい状態であったが、2期には、動作課題以外に子どもと対面する形で身体遊びも行うことで、動作課題にも取り組めるようになり、Trと目を合わせ、働きかけに応じて身体を動かせるようになった。この時期、（もともと言葉自体は出ていたが）周囲の人と言葉でやり取りすることが増えてきた。3期に入ると、腕上げを「これ（指差し）でやる」と言ったり、片膝立ちで「10秒頑張る」などと動作課題に主体性を持って集中しながら取り組む様子が見られるようになり、その達成感、自己効力感が体験できているように感じられた。4期では、



模倣動作課題でもTrに合わせ動きを正確にゆっくりできるようになり、一体感を味わいながら動作課題を楽しめるようになった。一方、自分流のやり方を強く主張したり、わざと自分勝手に動くなどして面白がる（からかう）ような面も見られるようになった。しかしこれらは、成長の一つのステップとして見られる自己主張として見なせるように思われる。実際、園でも職員と自ら積極的に言葉で話すなど対人的な関わりに広がりが見られたり、周りの状況を見て行動できるようになり、様々な物事に対しても意欲的に取り組むようになっていく。

K児はもともと発達の遅れ自体は軽度であり言葉自体はある程度でていたが、人と上手に関わることは難しさがあり、落ち着きがなく、ものごとへの集中も続かない面が見られていた。動作法場面においても、当初は動作課題になかなか応じることが難しかった。セッションを通し、Trによく注意を向けられるようになり、動作課題にも集中して取り組めるようになってくるにつれ、日常場面においても対人的な関心が高まり、学習課題や食事場面などでも注意を持続して取り組むことができるようになった印象である。また、3期や、特に4期においては訓練課題について自分なりの提案や主張をするなど、自己意識が明確に感じられるようになり、心理的な主体性が窺えるようになった。また、当初、身体操作自体にも不安定さがあり、バランスが上手くとれず、膝立ちなどを嫌がっていたが、しだいに、自分でバランスをとることができるようになり、片膝立ちや片足での立位課題にも取り組むことができるようになった。これらバランス課題においても、一つには身体操作性とともに、自己制御感覚の高まりに寄与し、また、一つ一つの課題の達成感やそれに伴う自己効力感を多く体験することを通して、心理的な主体性の発達にも繋がったものと思われる。

#### IV. 総合考察

今回の自閉的な子ども2名の事例においては、両児とも約1年間という短い訓練期間であったにも拘わらず、その行動に大きな変化が見られた。初めは、両児とも落ち着きがなく、対人的な疎通性も弱い状況であった。トレーナーは、トレーニーと身体を介して楽しくやりとりする際、先に示したように、「落ち着いてゆったりした感じを体験させること、行動を少しでも自己調整できるようにしていくこと、子どもと視線（注意）を共有していくこと」によって、子どもの中に他者の存在を（自分との関わりの中で）実感する力を育てていくことを特に重視し、繰り返しトレーニーに働きかけてきた。そうした働きかけを積み重ね、徐々にトレーナーとトレーニーの間でやりとりが深

まっていた。そして訓練終了時には、訓練場面、日常場面において、全体的な行動の落ち着き、他者への関心と、能動的な関わり、言葉でのやりとり、身辺自立など、行動に大きな変化が見られた。身体を介したやりとりを行うことにより、自閉的な子どもの弱い部分である対人的な関係性を育むことをはじめ、子どもの幅広い発達の基盤を育むことができたものと思われる。

対象児S、Kともに、定期的に「遠城寺式・乳幼児分析的発達検査表」による発達検査を行った。検査結果において、ともにセッション期間中を通して大きく発達したことが窺える。両児ともに、「基本的習慣」、「言語理解」の項目で、発達の伸びが大きかった。また、自閉的な子どもでは発達の遅れが目立つ「対人関係」、「発話」の項目においても、発達の大きな伸びが見られた。

また、自閉的な特徴がどのように変化したのかについて、筆者が対象児S、Kともにインテーク時とセッション終了時の2回行った「小児自閉症評定尺度(CARS)」では、S児は、目が合わない、落ち着きがない、自傷行為があるなど、重度自閉の特徴を多く見せていたが、1年間の訓練を経た卒園時には、生活全般の多くの部分に成長がみられ、自閉的な特徴は軽・中度にまで変化してきた。K児は、当初より自閉的な傾向は軽度であったが、卒園時には人への自発的な働きかけなどの点においてかなりの成長が見られており、自閉的な傾向はほとんど見られなくなった。このCARS得点からも、対象児S、Kともに、動作法プログラムに参加してきた1年の間に、全体的な自閉的傾向が弱くなっていったことが明らかになった。

これらの結果は、援助者と楽しく身体を介してやりとりすることや、援助者と視線（注意）を共有することを重視した取り組みが、「自己－他者」という対人的な繋がりを育み、自閉症児や自閉的傾向を示す子どもたちの、他者と関わる力を育むことはもちろん、それに伴う言葉の使用、また、自閉的傾向の軽減による幅広い成長を促すことができる可能性を示唆していると言える。

本研究における活動には、愛知教育大学の学生だけでなく園の職員もトレーナーとして参加している。通園施設と協力して取り組みを行ったことで、職員は以前に比べて子どもの身体発達などに目が向くようになり、日頃からの身体を介した働きかけの活用も場面に応じて活用できるようになってきている点もある。また親も、子どもと身体で関わることの大切さを知り、家庭でこうした活動を取り入れるケースも見られている。ただし、やはり当初は身体を介して関わることにそのものに馴染みがなく、職員の中に戸惑いがあったことも事実である。動作法の知識のない援助者に対する導入の在り方については、今後さらに検討してい

く必要があると思われる。

## 引用文献

秋山知子，加藤元一郎，鹿島晴雄 2005 扁桃体の機能画像研究 ―特に顔，表情，視線の認知について― 精神科治療学，20，3，263-269.

神尾陽子，Julie Wolf，Deborah Fein 2003 高機能自閉症とアスペルガー障害の児童青年の潜在的な表情処理：表情は認知をプライムするか？ 児童青年精神医学とその近接領域，44，3，276-292.

森崎博志 2002 自閉症児におけるコミュニケーション行動の発達的变化と動作法 リハビリテーション心理学研究，30，65-74.

森崎博志 2004 自閉的な子どもへの身体を介した関わりの意義 ―発達の視点からの理論的考察― リハビリテーション心理学研究，32，2，49-61.

## 謝辞

トレーナーとして訓練を担当していただいた長嶋桃子氏，伊藤由美氏，また，二人の子ども達に感謝申し上げます。